

わが国古代における鶏肉・鶏卵の食用

尾 崎 直 臣

緒 言

わが国における鶏肉および鶏卵の食物としての利用は、今日でこそ食生活の近代化、所得の上昇、栄養知識の普及などにもなつて著しい増加をみせており、たとえば国民栄養調査の食品群別摂取量によつても昭和四八年度一人一日あたり鶏肉一二・〇グラム、卵類四一・三グラムという値が得られているが、さかのぼつてその歴史をかえりみると、中世以降とくに近世以降に関しては、諸種の文献史料によつてそれらの利用の実態がある程度明瞭に知ることができるものの、平安時代以前については、その利用が比較的限られていたであろうと推測される程度であつて、実情は模糊として甚だ把握し難い情況にある。

実情をつかむことを困難にしている第一の理由は、もちろん、鶏肉や鶏卵はもとより鶏そのものに関しても関連した史料がきわめて貧困であることによるのであるが、他面、鶏および卵というものが文化的、社会的に特殊な意味をもっていたことが問題を一層むつかしくしていると思考される。すなわち、鶏という動物が神聖視されていたり闘鶏、報晨、

卜占等に利用されていたため、飼養されていたことが明らかなきでもその肉や卵が食用の対象となつていたか否かが速断できない場合が多いこと、卵はまた生命の誕生という神秘性が特殊な感情を生ぜしめ、それがその食用ということに何らかの影響を与える場合があつたであろうこと、仏教の普及や農業の振興等の施策上、鶏をも含めて家畜あるいは獣類の殺生や食用がしばしば禁止されたこと、しかし家畜のなかでは四足獣ならぬ鳥類でありかつ直接農耕に関与することのない鶏については、さらにその卵についてはなおのこと、このような禁止がゆるやかである場合も多かつたこと、一方では殺生の戒がとくに一般庶民層にどの程度浸透しどの程度まもられていたか充分明らかでないこと、その場合にもやはり、家畜ではあるが鳥類である鶏に対する当時の人たちの心情が四足獣にくらべてどのように相違していたか一層明らかでないこと、さらに、朝鮮等から食肉の慣習をもつて渡来した人々が諸種の社会的政治的条件下でどのように反応したかという実情がつかみ難いこと、などの諸点が問題をより複雑にしその解明をますます困難にしているのである。他方ではわが国古代の文化は中国や朝鮮の文化の影響を強く受けており、彼らの食生活にしてわが国民のそれに及ぼすところも少なくはなか

ったし、とくに彼らのうちわが国に渡来定住した人たちの影響は無視することができない。

以上のごとき多くの事情から、わが国古代における鶏肉および鶏卵の利用状況を直ちに究明することは容易なことではないと同時に、問題の解明はこれらの諸背景を明らかにしてはじめて可能であるということになる。そこで本稿では、できるだけ広い観点のもとに鶏およびその卵について本問題に関連した諸事項を整理検討して、真相の把握をすすめるとともに将来におけるこの種問題解明の一助としたい。

なお本稿において古代というのは、平安時代以前の時代をすべて含めるものとする。

〈文献〉

厚生省公衆衛生局栄養課編『国民栄養の現状（昭和四七・四八年度国民栄養調査成績）』第一出版（一九七六）

鶏の起源と伝播

現在の鶏の祖先は、アジア東南部の熱帯地方に野棲している四種類の野鶏（赤色野鶏、セイロン野鶏、灰色野鶏、緑襟野鶏）のうち赤色野鶏であるとするダーウィン以来の一元説がかつては有力であったが、今日ではこれら四種の野鶏の交雑によるものであるとする多元説が有力視されている。

野鶏の家禽化の時期および場所については正確には明らかにされていないが、インド、ビルマ、インドシナ半島あたりで家畜化されたものが、各地へ伝播したであろうと考えられている。一説によると紀元前三二〇〇年頃にインドで時報用に野鶏の家禽化が行なわれたのが最初であるとされており、またモヘンジョ・ダロ文明（前五五〇〇年頃）の跡から鶏を表現した遺物や家禽化していると思われる鶏の骨が出土している。そして前四〇〇〇～一〇〇〇年頃には、インド東部では飼育がかなり一般化していたと伝えられる。鶏はインドシナを経て中国南部に入り、次第に北部まで浸透した模様であるが、前三三〇〇年頃の殷墟の発掘物から中国ではすでに当時鶏が家禽として飼養されていたと考えられ、また鶏の飼育は前三〇〇〇年にはじまるとさえいわれている。

西方への伝播については、前七〇〇〇～六〇〇〇年にインドに侵入したペルシア人が鶏を入手、さらに伝播して前四〇〇〇年代にはギリシアにおいてかなり一般化していた模様であり、その後ローマに伝わり、さらにヨーロッパ各地にひろまった。一方ではペルシアから黒海沿岸にそって北ヨーロッパに到達したといわれている。また中国の鶏も中央アジアを経て北ヨーロッパに到達したようである。オーストラリア、ニュージーランド、アメリカへはヨーロッパ人によってもたらされたとされている。そして現在では鶏はほとんど全世界に分布しており、このことは鶏が強い順応性をもち人間によって古い時代から飼養されていたことを示している。

鶏のわが国への伝来については、弥生時代の前期頃に中国から朝鮮を経由して来たものが主流とみられている。鶏が中国から朝鮮に入ったのはかなり古い時代のことと想像されている。わが国へ最初に伝わった鶏

はいわゆる地鶏型といわれており、古代ではこの他に小国型の鶏が平安時代初期（あるいはそれよりややさかのぼる時期）に遣唐使によってもたらされたとされている。

〈文献〉

芝田清吾『日本古代家畜史の研究』学術書出版会（一九六九）

加茂儀一『家畜文化史』法政大学出版局（一九七三）

鶏と卵のもつ特殊性について

人類が最初に鶏を飼育した目的は、食用よりもむしろ闘鶏、報晨等にあつたとされている。原産地からの鶏の原始的拡散は闘鶏とともになされたとさえいわれており、最近までほとんど全世界に闘鶏の風習がみられたという。現在でもなお、南アジア一帯をはじめ各地で闘鶏競技が行なわれている。また鶏はやくから報晨にも利用され、光の到来を告げるところからペルシアのゾロアスター教におけるごとく太陽との関連で神聖視されるようになり、さらには卜占の風習や鶏や鶏卵を祭祀の供え物とする風習も生まれた。洋の東西を問わずこれらの習俗はひろく存在していたし、日本もその例外ではない。鶏の飼養がこのようにその食用、採卵以外に多岐な目的を有し、とくに古くはそれがきわめて重要な意味をもっていた以上、養鶏の事実を以て直ちに鶏肉、鶏卵の食用にこれを結びつけて考えることが甚だ危険であることはいうまでもない。

また仏教上の殺生禁断とは別に、鶏を神聖視したり、あるいは忌んで

飼わなかったり、鶏肉や鶏卵を食べなかったりするところがわが国でも最近まで各所にみられた。たとえば、大阪府の道明寺村（現美陵町）では鶏を飼わないし、また出雲の美保関でも鶏を飼わず鶏卵を食べない。秋田県仙北郡田沢湖町の玉川部落では鶏を神聖視して卵を話題にすることもはばかられた。山形県西置賜郡小国町の金目部落でも鶏を飼わず卵を食べないし、同町の飯里温泉でも卵を食べない。また東北地方でおしらすを信奉する家では鶏卵を食べると口がまがるといわれたという。宮城県牡鹿郡女川町江島では鶏を飼ったり食べたたりすることをきらうだけでなく、その死骸をかつお船に持ち込むことを禁じている。鶏については黄金の鶏が地下に埋まっているという分布のひろい金鶏伝説があり、この例などもそれに結びついたタブーの一つである。いずれにしてもこれらの鶏に関する禁忌は、それぞれに発生由来があるものであるが、最近においてもこのように日本各地にみられており、時代をさかのぼればさらに多く全国に分布していたものと想像される。

つぎに卵にかぎっていうならば、いわゆる卵生神話があり、また特殊な民間伝承がみられる。

宇宙や神や人類が卵から生まれたとする卵生神話は、ギリシア、エジプト、インド、フィンランド、ポリネシアなど世界の諸民族にひろくみることができるといえる。『日本書紀』に、天地・陰陽の生ずる前の渾沌とした状態が鶏卵（原文では「雞子」）のようであり、そこからやがて天と地がわかれたとある（同書巻第一神代上）のもその一種である。また『今昔物語集』天竺部の巻第二第一五話「須達長者蘇曼女、生十卵語」（出典

は『賢愚経』巻第一三「蘇曼女十子品」第五八）や、巻第五第六話「般沙羅王五百卵、初知父母語」（出典は『雜寶藏經』巻第二「蓮華夫人緣」、「鹿女夫人緣」）は、いずれも卵から男子が出生する話をのせている。

卵のもつ生命力は一方では多くの民間伝承をつくり出している。とくに鶏卵についての民俗はきわめて豊富である。たとえば、エジプト、ペルシア、ギリシア、ローマでは、卵を崇高な神の創造物、宇宙の象徴としてこれを贈る風習があった。一見生命のない物質にしか見えない卵から新しい生命が生ずるところから、卵はまた復活のシンボルとしてギリシア人、ローマ人、ユダヤ人、アッサムのカーシ族、ポリネシアのマオリ族の間で死者の埋葬や葬儀の際に用いられ、またキリスト教の復活祭における卵の諸風習は周知のとおりである。また卵を用いた占いがイングランド、スコットランド、スペインにあるという。このほか卵に関する民俗はきわめて多く世界各地に分布している。

このように、生命の母体である卵のもつ生命力は超自然的なものとみなされ、その神秘性に対する認識は各民族の根底にある感情であって、それが卵の食用にあたって、ある場合には積極性を与えまたある場合には一種のためらいをもたらしただであらうことも想像できることである。

以上述べた鶏に関する各種の禁忌ならびに卵に対する特殊な観念のもたらす結果は、鶏肉、鶏卵の食習の歴史を検討する場合、後述する仏教の普及をはじめ農業の振興等に関連しての家畜一般に対する殺生禁止の施策ないしは思想の影響とともに、充分に留意しておかなければならない事柄である。

〈文献〉

『世界大百科事典』平凡社（一九七五）

井之口章次・鎌田久子・亀山慶一・竹田旦『ふるさとの民俗』朝日新聞社（一九七五）

『日本書紀』前編（『新訂増補国史大系』第一巻上 吉川弘文館（一九六六））

『今昔物語集』一（『日本古典文学大系』22 岩波書店（一九六三））

R・ブラッシュ著・松本享訳『これがはじまり——西洋迷信故事物語——』三笠書房（一九六八）

中国古代における鶏肉・鶏卵の食用

古来わが国の文化が大陸のそれに負うところが甚だ大であったことは言をまたない。ことに古代にあっては、律令制をはじめ中国の諸制度を範として国家の形成が行なわれ、また遣唐使や留学僧によって中国の文化がもたらされるなどの国との交流が繁く、日常の生活にもその影響を少なからず受けていた。一方、朝鮮が古くから中国と深い関係にあったことはよく知られているところであるが、この時代には、多くの点で中国と同様の風習を有し中国の影響を強く受けている朝鮮半島からの渡来民が多数わが国に定住した。彼らが大陸風の生活習慣を直接わが国内にもちこんだことの意味はきわめて重要である。以上の諸点から、日本民族の思考や生活を考えるにあたっては、中国人のそれを看過するわけにはいかない。そこで、わが国古代における鶏の利用の歴史を考察する

にさきだって、まず中国古代における情況の概略を把握しておくこととする。

さきに述べたように中国における鶏の飼養の歴史はきわめて古く、殷墟から発掘された甲骨文字のなかに牛、馬、羊、豕、犬とともに鶏をあらわす文字が発見されており、殷の時代にはすでにそれが飼養されていたものと考えられる。また殷の紂王を討つために誓った周の武王の言葉のなかに、「牝雞無_レ晨。」(『書経』「周書牧誓」)とある。さらに、同じ頃には、野鳥肉は食べてよいが鶏肉は食べてならないという鶏の愛護令が出されているともいう。その後の各種の史料にも鶏が飼養されていたことを示す事例は多く、『周礼』によると、鶏は馬、牛、羊、豕、犬とともに六畜の一つに数えられている。

ところで、古代、鶏に関連する用語には肉や卵の利用を表現した言葉が少なく、報晨、卜占、闘鶏、神への犠牲を示すものが多いといわれていることなどから、これらの用途が重要であったことがうかがわれる。しかし、鶏は古くから食用にも供されていた。以下にそれを示すいくつかの例をあげる。

まず『論語』の「陽貨第一七」に、孔子が武城におもむいて子游の統治ぶりをみての言葉のなかに有名な「割_レ雞焉用_二牛刀_一。」があり、当時、鶏の料理が行なわれていたことを暗示するものであろう。同じく『論語』「微子第一八」には、孔子にはぐれた子路が隠者の家でもてなしを受けた際の有様を、「止_二子路宿_一、殺_レ雞為_レ黍而食_レ之、見_二其_二子_一焉。」と記している。これから察すると鶏肉は当時ごちそうの一つとされていたの

であろうか。後述するように、同じ家禽の肉でも鶏の方が家鴨より格が上であったらしい。しかし黍飯とともに不時の客に出すほどであるから、その食用はかなり一般化していたものと想像される。

『礼記』の「月令」の中には、一年の各月における天子の主たる食物が記されているが、孟夏(四月)、仲夏(五月)、季夏(六月)の条に「食_二菽與_レ雞_一。」とあり、豆と鶏とがあげられている。仲夏の条にはさらに「是月也。農乃登_レ黍。天子乃以_レ雛嘗_レ黍。」とあり、小鶏を副食にして黍を食べたことがうかがわれる。この黍と鶏は形式的な組合せに過ぎないであろうが、当時鶏が食用の対象とされていたことを示すものとみてよい。

さらに具体的には、『礼記』の「内則」に、「麦食肺羹雞羹。」「濡_レ雞醢醬実_レ蓼。」「鶉羹。雞羹。鴛。釀_二之_レ蓼_一。魴鱖黍。雛燒。雉。薺。無_レ蓼。」などとあるところから、鶏の料理には羹(あつもの)、煮物、小鶏の焼物などがあり、それぞれに各種の調味料あるいは香辛料が用いられていたことがわかる。またやはり内則にある「秋宜_二犢麋_一。膳膏腥。」から、膏腥すなわち鶏の脂肪が料理に用いられていたものと思われる。

『淮南子』「説山訓」には「善学者。若_二齊王之食_レ雞_一。必食_二其臠數十_一。而後足_レ。」とあり、鶏の足の踵が王の食前に供されたのであろう。また『春秋左氏伝』(巻第一八「襄公五」)「襄公二八年の条には、朝廷で賜わる膳部は一日に鶏二羽の定めであったのを料理人が鶩(家鴨)でごまかし、給仕人がそれと知って肉を除いて汁ばかりを出したので、大夫たちを怒らせたという記事があり、これからすると鶏の方が家鴨より上等で

あったようである。

右にあげた諸例から、紀元前数世紀間のことにおいて中国で鶏の食用がかなり普遍化していたこと、および各種の調理法が確立していたことがわかる。しかし鶏卵の利用に関してはこの頃の史料に記事がみられない。

以上は漢民族に関しての知見であるが、江南地方に目を転ずるならば、『楚辞』に鶏が出てくるし、また長沙の馬王堆から鶏卵が発掘されているところから、当時江南の地においては、鶏肉ばかりでなく鶏卵も食用とされていたであろうと思われる。

時代はかなり降るが、六世紀に北魏の賈思勰によって撰せられ、後代まで強い影響を与えた農書、『齊民要術』がある。農業技術を記した本書の前半のなかの卷六（畜産）に、牛、馬、羊、豚、鵝、鴨などとともに鶏がとりあげられている。孵化、育雛を含めた養鶏の方法のほか、穀産卵（無精卵）を取って常食に供する法が記されており、そのなかに、穀産卵からは雛はかえらないからいつ食べても殺生の咎はなく、餅炙などに卵の入用なときはすべてこの卵を用いるのがよいと述べられている。あわせて、淪雞子法（鶏卵のゆで方）として、割って沸湯中に落し浮いたらすぐすくい取って塩、酢を加えて食すること、炒雞子法（鶏卵のいため方）として、割ってよくかきまぜ細かく裂いた葱白、塩、米、渾豉（丸のままの塩納豆）を加えて胡麻油でいためることが記されている。さらに養生論をひいて、鶏肉を小児に食べさせると害があると書かれている。

一方、同書後半の加工・調理の部には、他の家禽の肉や卵とともに鶏肉および鶏卵を使用した食品が多数記載されている。すなわち、鶏肉では、たとえば肺（ほしにく）、羹（あつもの）、蒸（むしもの）、腊（しるたき）、菹（すにく）がつくられ、また肉醬を溶くのに鶏汁が用いられている。鶏卵は雞子餅（たまごやき）にしたり、犬腓や苞腓という料理で肉のたまごと一緒に用いたり、あるいは各種の醬（ひしお）、脛（すしだき）の副材料として、また肉の炙（あぶりもの）の着色用として用いられている。鶏卵に関しては、加工用は別としても調理に際しては原則として加熱されており、これで見ると生卵に対する嗜好はないようである。なお家鴨の卵も加工・調理に用いられているが、鶏卵の利用の方が圧倒的に多い。

これらの加工法ないし調理法はいずれもきわめて具体的に記されており、かつ巧緻である。一例として腊雞についての記述を示すと左のごとくである。

腊雞一名雉雞一名雞臘以渾塩豉葱白中截乾蘇微火炙生蘇不炙與成治渾雞俱下水中焚煮出雞及葱漉出汁中蘇豉澄令清擘肉広寸余（以下略）
（金沢文庫本『齊民要術』）

以下、もりつけの方法と調理の別法とがやはり詳細に述べられている。大意は「しるたきどり。一名むしやきどり。一名とりじる。まるごとの塩豉と葱白、たてわりのしそ（これは微火で炙る、生しそなら炙らない）

を、成治したまるの鶏とともに水中に下して煮こなす。鶏と葱をとり出してから、汁中のしそ、豉を漉出して汁を澄ます。肉は一寸余のはばにきる。（以下略）」ということであろう。

『齊民要術』に出てくる畜肉で加工・調理の用例の最も多いものは豚と羊であり、それに次いで家鴨、牛、鵝、鶏となり、家畜ではないが鹿が鶏と同数で、以下麋（のろ）、兔、雉の順となる。したがって、全体として見た場合には、当時の肉用家畜・家禽のなかで鶏がとくに重要な位置をしめていたわけではないであろう。

しかし、以上述べたところからつぎのように考えてはば差支えないものと思う。すなわち、『齊民要術』は山東地方における農業に関して記されたものであるが、その内容から察するに、五・六世紀のころ少なくともその地方において鶏の飼養はかなりひろくなされており、鶏肉および鶏卵の食品としての利用が多岐にわたって行なわれていたであろう。

ところで、肉食の伝統を有ししかも仏教上の殺生戒の制約も実際面ではほとんどなかったかにみえる中国において、農業技術書である『齊民要術』のなかでも各種の家畜や家禽の肉を思うままに加工・調理して利用しているのは当然であるとしても、同じ書の中に、さきに記したように殺生の咎を意識しての無精卵の利用についての考えがみられるのは、卵に対してやや特殊な観念があったということでもあろうか。

これに関連して、当時の中国に鶏卵を食べたために悪い報いを得たという説話がある。たとえば『今昔物語集』の震旦の部をみると、巻第九第二七話「震旦周武帝、依食雞卵至冥途受苦語」（出典『冥報記』巻下）

として、北朝周の武帝（五四三～五七八）が鶏卵を好んで食べたため死後冥官に苛まれた話があり、また巻第九第二四話「震旦冀州人子、食鶏卵得現報語」（出典『冥報記』巻下）では、隋のはじめのこと、常に鶏卵を盗み焼いて食べていた小児が、現報によって田の中をはだして狂い廻り足に大火傷を受けた話が語られているのである。『今昔物語集』震旦の部には動物の殺生の咎についての説話がいくつかみられるが、このように卵のようなものについても、それを食べたことによって悪報を得るという話がとくにとりあげられている点、『齊民要術』の記載と照らして興味深いことであるけれども、この問題についてはここではさらに立入ることをさけない。

時代はさらに降って、唐もおわりに近い八四一年の白楽天の詩の中に「鶏毬餠粥」とあり、鶏肉の団子と飴の入った粥が食べられたことがわかる。また韓鄂の著わした歳時記である『四時纂要』の農業記事のなかに、他の家畜とともに鶏があげられている。

北宋の詩人蘇東坡の作品のなかには、様々な食品とともに鶏もみられる。また孟元老の都市繁盛記である『東京夢華錄』によると、北宋末年（一二世紀初め）の開封の酒樓では酒のさかなとして鶏もいろいろなかたちで供されており、羹、炙肉、炒肉などが記されている。北宋の料理書に『中饋録』があり、焙鶏なる料理があげられているが、当時の彼等の調理技術を示す一例として左に掲げておく。

用鶏一隻水煮八分熟剝作小塊鍋内放油少許燒熱放鶏任内略炒以錠子或

碗蓋定焼及熱醋酒相半入塩少許烹之候乾再烹如此数次候十分酥熟取用

抄訳すると、「鶏一羽を八分通り煮て、切り、鍋で一寸いためたのち蓋をしてよく焼く。醋と酒等量と塩を加えて煮、乾かしてまた煮ることをくりかえして熟するに至らしめる。」ということであろう。

鶏に関してだけみても、紀元以前からすでに各種の料理が存在していたのに加えて、『斉民要術』の例といい『中饋録』の例といい、後者がわが国の平安時代、とくに複雑な手技が用いられている前者にいたっては奈良時代以前のものであることを考えると、その調理技術の発達はおどろくべきものである。同時にそれにも増して、民族の嗜好や食事観のちがいをあらためて感ぜざるを得ない。

南宋初期にいたり再び江南の場合について一寸ふれておくと、天子に奉る料理ではあるが、その材料のなかに鶏もあるけれども、うずらの方が多く用いられたという。

これにつづく元は蒙古の遊牧民によってつくられた国であるし、この時代になると『斉民要術』のころからぼつぼつ普及しはじめた鉄製の調理器具がすっかりゆきわたったことも手伝って、一般的にはその料理や調理法もこれまでの漢民族のそれとはかなり異質な面をあらわしている。しかし、わが国古代に対応する中国の各時代についてはそのあらましを眺めたので、以後の時代に関しては別の機会にゆずり、おわりに一応のまとめを記しておきたい。

中国においても鶏が報晨、闘鶏などに重要な用途があったであろう

が、宗教的崇拝の対象として神聖視されるあまり、それが鶏肉や鶏卵の食用に対して強い制約となったということはないようである。さらに、中国では肉食の風習がふるくからあって彼らの食生活にそれが不可欠の要素として定着していたため、その後にはいつてきた仏教によっても肉食の慣習はほとんど影響されることはなかった。そして以上通覧したところから要約できることは、中国古代においては、ふるくから養鶏が行なわれていたこと、鶏肉もふるくからひろく食用に供され、その調理・加工もとくに時代がすすむにつれて高度の技巧をもって行なわれていたこと、鶏卵の利用は鶏肉にくらべると少なく、とくにはじめはあまり食用とされなかったようであるが、後には巧みに料理にとり入れられたこと、などであろう。

さきにも述べたように、わが国にその生活様式を直接もちこんだという点で、古代における移住者のうちの多くを占めていた朝鮮半島よりの渡来民の意義はきわめて大である。朝鮮はいろいろな面で中国の影響を強く受けていた。一方、朝鮮においても中国と同様ふるくから肉食が盛んで、家畜を屠殺しその肉もかなり食べられていた。そして中国から伝来した仏教の殺生禁断の教えも、朝鮮民族のなかにあった根強い肉食の習慣を変えることができなかったのは中国の場合と同様である。鶏も相当古い時代に中国から伝播したものと考えられているし、また朝鮮には鶏林という異称さえあり、鶏の飼育もさかんであったと想像される。他の動物とともに当然、食用の対象とされていたと考えられる。

本稿の主題から外れるので詳細に述べることはさけるが、中国や日

本の鶏肉、鶏卵の食用が世界的にみた場合どのような位置を占めているかを知る上の参考として、最後にヨーロッパにおける食用の状況について主として加茂儀一氏の所説を要約して付言しておく。

古代ギリシアにおいては、はじめのうちは鶏は光や太陽の神と関連をもつて考えられていた。そのために鶏卵を食べることは忌避されていたが、やがて卵を食用とする目的で養鶏が行なわれるようになった。卵をボイルする道具があったといわれており、他の鳥卵とともに鶏の卵もこのように調理されていたらしい。鶏そのものは神への犠牲として用いられたものを食用とするようになり、紀元前四世紀頃になるとその肉を食べることに對するタブーもなくなっていたようである。ローマにおいても鶏が神聖視されて鶏肉を食用とすることがはばかれていたが、その全盛時代になると、まず犠牲に供した鶏が食べられやがて貴族や富有階級の食卓にもものぼるようになった。また帝政時代の初期には鶏卵を食べることはふつうに行なわれていたようである。そしてキリスト教がはいつてきてからは偶像崇拜の観念は異教的なものとして排斥され、その結果鶏も一般的な重要な家禽の一つとして取扱われるようになった。ゲルマン人や八世紀以降西ヨーロッパに侵入したヴァイキングの間でも、鶏が光の象徴でありまた夜の悪魔を払うものとしてその肉を食べることは忌避されていたが、卵はときどき食べられていたようである。しかし中世以降キリスト教の普及の結果、偶像崇拜の思想がなくなるにつれて次第にこの観念がうすらいでいくとともに、中央ヨーロッパにおいても鶏は最も重要な食用家禽となって肉や卵を食用にするために飼養されるよ

うになり、僧院がその繁殖を奨励したことも手伝って、それまで盛んであった鶏を凌駕するにいたったという。

〈文献〉

- 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』経子史部第二卷・易经・書経 国民文庫刊行会（一九二二）
- 芝田清吾『日本古代家畜史の研究』学術書出版会（一九六九）
- 加茂儀一『日本畜産史』法政大学出版部（一九七六）
- 吉田賢抗『論語』（『新釈漢文大系』1）明治書院（一九六九）
- 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』経子史部第四卷・礼記 国民文庫刊行会（一九二二）
- 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』経子史部第一卷・淮南子 国民文庫刊行会（一九二二）
- 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』経子史部第六卷・春秋左氏伝下巻 国民文庫刊行会（一九二〇）
- 篠田統『中国食物史』柴田書店（一九七四）
- 賈思勰撰・西山武一・熊代幸雄訳『校訂訳註齊民要術』アジア経済出版会（一九六九）
- 『齊民要術』および『中饋録』の原文引用は左記によった。
- 篠田統・田中静一編著『中国食経叢書』下巻および上巻 書籍文物流通会（一九七二）
- 『今昔物語集』二（『日本古典文学大系』23 岩波書店（一九六二））
- 加茂儀一『家畜文化史』法政大学出版局（一九七三）

〈注〉

古い時代の文献より、字句、文章を引用する場合には、組版の便のために、異体字はなるべく現在一般に使用されている字体にあらためた。(以下の章においても同様である。)

わが国における鶏肉・鶏卵の食用(一)

もっぱら狩猟、漁撈、採取によって食料を得ていた縄文時代にあつては、野鳥およびその卵も他の自然の動植物とともに食料の対象とされていたものと考えられ、事実、種名の判明しているものだけでも二五種類の鳥類の骨が日本各地の遺跡から発見されている。

縄文時代もおそらく晩期にはすでに焼畑を中心とする農耕が行なわれていたようであるが、弥生時代に入り水稻の栽培とともに本格的な農耕文化の段階となるわけである。しかしこの時代といえども食料のうちのかかなりの部分はなお自然の動植物に依存していたであろう。

さきに述べたようにわが国への鶏の伝播は弥生時代の前期頃におそらく中国から朝鮮を経由して来たものが主流であると一般にみられているが、鶏の骨の出土の状況をみると、それ以前にも若干の遺物を認めることができる。すなわち、古いところでは縄文晩期の愛知県伊川津貝塚から牛、馬、犬、猫とともに鶏の骨が発見されており、弥生中・後期には静岡県登呂遺跡、長崎県原ノ辻貝塚、同唐神貝塚からやはり他の家畜とともに鶏の骨が発見されている。またそれにつづく古墳時代には長崎県平出遺跡から牛、馬とともに鶏の骨が発掘されており、千葉県大黒山洞窟

からも鶏の骨が発見されている。直良信夫氏は、伊川津貝塚の鶏は雄ばかりではなく雌も飼われていたので、その飼養目的が相当度に実用性をおびていたとみてよいであろうとし、また、すでに原始農業の域を脱して計画性の豊かな農生活に打込んでいたと思われる平出では、養鶏についても採卵、採肉、採糞まで発達していたと想像するのが妥当ではあるまいかと述べている。

一方、古墳時代には各種の埴輪がつくられているが、動物の埴輪のなかでは馬が最も多く鶏がこれについて多く出現している。鶏の埴輪の出現地はほぼ全国にわたっているが関東地方が圧倒的に多い。鶏の埴輪が多数出現することはもちろん当時鶏が重要な家禽であったことを物語るものであるが、埴輪に鶏が多い理由として後藤守一氏は、霊魂の復活と関連して葬儀に鳥を鳴かせる習俗と関係があったであろうと推察し、金谷克己氏も埴輪動物に飾馬や鶏の多い事実から、やはり葬列につらなるもの、あるいは祭儀に列するものであると考えている。しかし芝田清吾氏は、このような宗教的意義を一概に否定はしないまでも、埴輪の鶏のなかには雄のみでなく雌があり、雌雄のつがいがあり、雛さえ作られている背景には、宗教的観念や報農、闘鶏としての利用から進んで、すでに稲作農業経営の要員として採卵、採肉、愛玩などひろい目的で飼われていたと考えて差支えないかのようにであると述べている。

文献史料の上で鶏のことが最も古くあげられているのは『古事記』や『日本書紀』の神話であろう。すなわち、天照大神が天の岩屋戸に入ったとき、八百万神が集り大神を岩屋戸からひき出すためのたての一つ

として常世之長鳴鳥を鳴かせたという話である（『古事記』上巻、『日本書紀』巻第一神代上）。この神話の本質は光、太陽の崇拜であり、鶏がそれを象徴するものという考え方があるのであろう。あるいはさらに、夜の闇である死の世界を昼の光のかがやく生の世界によみがえらせる意味が含まれているのかもしれない。この点はさきの埴輪が葬儀に関係するということと相通するものであろう。このように、当時わが国で鶏は神聖な動物として扱われていたと想像され、したがってそのような鶏の肉や卵が無条件に食用として利用されていたとは考え難い点の一つである。

つぎに鶏の古い呼称についてしらべてみると、さきの「常世之長鳴鳥」もその一つであるし、『日本書紀』巻第一七継体天皇七年の条にかげられてゐる勾大兄皇子（後の安閑天皇）の歌のなかに「千魔伊禰矢度爾。爾播都等爾。柯稽播離俱離梨。」とあり、『万葉集』にも「庭つ鳥鶏の垂尾の乱尾の長き心も思ほえぬかも」（巻第七、一四一三）などと詠まれている。「かけ」というのは鶏の鳴声によってつけられた名である。また「にはとり」または「にはつとり」というのも庭つ鳥であって家禽を意味し、はじめは右の歌でもわかるように「かけ」の枕詞として使われたものであるが、一説によると丹羽鳥すなわちあかい羽の鳥、美しい羽の鳥の意であるという。つまり古代における原始的な鶏の羽色が多く赤色を帯びていたことに由来するというわけである。このような例をはじめとして鶏の和名がいずれも雄を表現したもので、卵肉の生産を示したものがなくところから、わが国の場合も初期においては報晨、

闘鶏、卜占などが養鶏の重要な目的であったことが想像されている。そして夜明けの時を告げる鳥としての意義と闘鶏としての利用はずっと後世まで尾を引いている。

ここで、文献史料の面で当時の肉食一般についてさぐってみたい。まず『魏志倭人伝』をみると、そのなかに忌中は肉を食べないと記されている。このことは、ふだんは肉食が行なわれていたことを暗に示している。また同書では牛、馬がいないと書かれている。当時の日本に牛馬がいなかったというのは事実と反するとされているが、同書の著者がそのように認識している以上、ここで暗示している肉食というのは野獣の肉が食べられていたことを指しているものであろう。記紀や『万葉集』からも、当時の肉食の模様を若干ながら推測することができる。たとえば、『日本書紀』には、保食神が飯、大小の魚、狩猟の獲物を口から吐出したこと、その死体から牛、馬、粟、蚕、稗、稻、麦、大豆、小豆が生じたことが記されている（巻第一神代上）。また『日本書紀』などから天皇の一家がしばしば狩猟に出かけていたことがうかがわれ、『万葉集』のなかにも狩猟に関する歌が多い。そして、その獲物の鳥獣はただちに調理されて食膳に供された（たとえば、『日本書紀』巻第一四雄略天皇二年一〇月の条）。鹿のために痛みを述べて作られたという『万葉集』巻第一六「乞食者詠」（三八八五）からわかるように、肉だけでなく内臓までも膾や塩辛にして食べたらしい。さらに家畜である牛の肉の食用を示すものとして、『日本書紀』巻第三神武天皇戊午年八月の条に東征の際、弟猾が「牛酒」（牛肉と酒）をふるまったことが記されてい

るし、『古語拾遺』には大地主神が田をつくる日に「牛実」（牛肉）を田畑で働く人に食べさせたという記事がある。

このように、野生の鳥獣や一部の家畜が食用とされていたということは文献にみられるところであるが、鶏に関しては、さきにひいた例や『日本書紀』巻第一四雄略天皇七年の条にみられる前津屋事件における闘鶏の例など、それが飼養されていたことを示す記事はあっても、鶏肉や卵が食用とされていたことを記したものは見出すことができない。

以上のように、古くは宗教的意義のためと報晨、闘鶏等に主要な飼養目的があったと思われるために、また家畜一般が食用とされることが少なかったという一般的条件のために、鶏があまり食用としての対象とされ得なかったであろうと推理される反面、さきに述べたように、一方では発掘された古骨や埴輪の情況より食用としての利用も推定されることから、当時、宗教的意義や報晨、闘鶏等の重要な飼養目的がありながらも同時に食用としても利用されていたのか、あるいはつぎに述べる渡来民の場合にみられるように、社会集団や階層、地域によってそれぞれ鶏に対する意識や飼養目的に相違があったのか、あるいはまたこの時代内においても年代によって食用としての比重にちがいがあったものなのか、いろいろ考えられるところであるが、明確な結論はなかなかだし難い。

そこで見過してはならないのは、大陸からの渡来民の役割である。中国における後漢末期からの社会不安や、紀元前後からの朝鮮での争い、またわが国のその粉争への介入、宋、北魏との朝貢関係、やや時代が降ってはわが国から隋、唐への使節の派遣等にもなうそれらの国との交

流、これらの事情を背景としての中国大陆やとくに朝鮮半島からの渡来者は古墳時代には時がすすむにつれて急速にその数を増し、多くは日本国内に定住した。当時大陸の先進文化にあこがれ導入をはかっていたわが国では、その産業技術とともに彼らの入国を歓迎し、渡来者たちはわが国内においての生活も自由で彼ら固有の風習をもって独自の集団生活をつづけた。とくに食生活は、元来保守性の強い性格からいって、強固に維持されたものと考えられる。そして結果としては、彼らの肉を常食とする風習が具体的な形としてわが国内にもちこまれたことになる。

一方、武具や衣類などのための皮革の需要がわが国で次第に増加するにともない、牛や馬を殺して皮革を得る必要に迫られたが、その役割は、すぐれた皮革製造の技術をもちかつ屠殺を常として血を穢れとする風習のない彼ら渡来民の手によってもっぱら行なわれた。また牛馬を屠殺して神に供えるというのも彼らの風習であった。これらの場合もちろん肉は食用にまわされたはずである。そのような彼らの生活のなかでは、牛や馬だけでなく、それにちなむ多くの地名があることから察せられるように猪も飼育され食べられていたし、犬の肉も食べられていたとみてよい。このような情況のもとで、鶏も飼われ、その肉や卵が食用の対象とされていたと考えるのはむしろ自然であろう。さきに過去からこの時代までの中国の情況をみた際、食生活のなかに鶏肉や鶏卵もかなり組込まれていた事実からしても、渡来人たちが、すでに日本に存在しており繁殖・飼養も容易である鶏を、飼って日常の食用として利用しなかったとは考えられないことである。

彼ら渡来人で帰化した者を日本人の新構成要員と考えるならば、当然、歴史的にはこの期において一部にしる日本人の食生活に新たな変化がおこったとすべきであるが、自ら育てた家畜を自分の手で殺して食べるという彼らの習慣は、そのような伝統にとぼしくしたがってそのようなことに心情的に強い抵抗感を有していたであろう土着の日本人には、受入れることは甚だ困難なものであったであろう。加茂儀一氏は、『古事記』中巻応神天皇の条にある新羅で牛を殺してその肉を田畑で働く人に食わせていたという記事をもひいて、さきにここで記した『古語拾遺』の田畑で働く人に牛肉を食べさせたというのも、その内容からみて朝鮮から日本に入ってきた人々の風習であり、わが国の古代に牛肉を食べる風が存在していたことは明らかであるがそれはおそらく外来民の風習であったと思われる。しかしながら、土着の日本人も農耕のためにはすでに家畜を飼っており、その食生活も彼らのこのような習慣に直接せつすることによって、何らかの影響は受けずにはおかなかったと考えるのが妥当ではあるまいか。

このように、渡来民は肉を常食とする習慣や家畜を屠殺する風習ともなつてわが国に定住し、それまでの日本人の社会に新しい変化を加えたのであるが、後に述べるように、彼らのそのような生活がやがては、政治的な意味を帯びて彼らを特別視したりさらには動物の屠殺や肉食の禁止施策をもたらす一因ともなったといわれている。

以上述べたように、諸種の条件の交錯を考えた場合、当代における全体像の把握は甚だむづかしい。ここではかなり大雑把ではあるが、総体

的にみて一応つぎのようにまとめておくこととする。すなわち、鶏のわが国に伝来した弥生時代前期または縄文時代晩期より紀元後五、六世紀あるいは七世紀頃にかけての鶏の飼養は、闘鶏、報晨、卜占の目的や宗教的意義を強く有していたため、食用としての利用がかなり制約されていた点もあったと思われるが、その反面、採肉、採卵のための実用的な飼養も行なわれていたと考えられる。そして、一般に狩猟によって得られた野獣、野鳥の肉はもちろん、家畜の肉も食用とされていた。狩猟による動物の肉はふるくから食べられており、内臓まで食用の対象とするようなかなり徹底した食べ方がなされていたらしい。家畜の肉を食べていたのは朝鮮や中国からの渡来民が主体であったと考えられ、したがって鶏の食用としての飼育も彼らを迎えた段階においてより多くなされるようになったのではなからうか。すなわち、その程度は明らかではないが、当時すでに鶏肉と鶏卵の食用が、少なくとも一部においてはかなりなされていたものと考えられる。

弥生時代から古墳時代のはじめにかけてはもちろん、古墳時代の後期も、仏教上の施策にもとづいて殺生がやかましく戒められる以前であり、さらに農業振興や軍備の充実に関連してたとえ家畜に対する管理施策はとられることがあっても、直接的な食用禁止令がきびしく発せられることもなかったし、また渡来民に関する後述するような問題もまだ生じていなかったであろう。したがってこの時代においては、人々の家畜の食用に対する精神的抵抗も、少なくともその意味においては後代におけるほど強くはなかったであろう。とはいっても牛馬の場合には農耕上

必要な家畜であり、また馬については古墳時代も時がすすむと軍事的に重要な意味をもったであろうから、たとえ施策上の食用禁止はなくても、実際上は食用のためにわざわざ屠殺するようなことはあまりなかったであろうが、鶏の場合にはそのような制約もないし、また牛馬とちがって繁殖も容易であることから、牛や馬に比し鶏肉、鶏卵とも食用の対象とされる機会がむしろ多かったのではなからうか。

ところで、鶏肉が食用とされていたと想定する場合、とくに後述するように採卵を主目的としての養鶏も行なわれていたのではないかということと考えると、当時の鶏の産卵能力について一考しておく必要がある。産卵数にははたしく少ないとすれば、そもそも卵を食用とすること自体が事実上ほとんど行なわれ得なかったであろうと思われるからである。また肉の食用を考える場合は、その頃の鶏の体格はどのようであったかということも参考になるであろう。そこで、本稿の対象としている時代の鶏の特徴を知るためにいくつかの資料を、ここであげておきたい。

すでに述べたように、平安時代に小国がもたらされるまでは、弥生時代以降、地鶏のみが飼養されていた。（ここでいう地鶏は、小国渡来以前の本来の地鶏をさすのであって、今日各地方で普遍的に飼われている古い鶏種をさしてしばしばいわれている広義の地鶏のことではない。）また小国渡来後も、平安時代にあつては小国はまだあまりひろく飼養されておらず、やはり地鶏が主体であったと考えられる。

地鶏の産卵能力について小穴彪氏は、佐藤信淵の『經濟要録』（文政

一〇年、一八二七）の記事から、それが明治時代に輸入された実用鶏に劣るものではなく、また今日いわゆる卵用種として用いられているものが二、三年で産卵力が低下し長つづきしないのに対して、地鶏が二歳より六歳までという長期間にわたって産卵力がおとろえないことを指摘している。また同氏は、その卵の重量は一二、三匁（四五、四九グラム）、卵殻は褐色、内容はよくしまつて味がよいと述べている。『經濟要録』より関係部分を左に掲げておく。（同書卷之二開物下篇のうち家禽第三）

総て雌鶏は二歳より六歳までの稚雛に能く食物を与へ、法を以て此を飼ふときは、毎年卵を生むこと百四五十に及び、六歳より以上は年を重ねるに従ひ、次第に卵を生むこと少き者なり、

一方、芝田清吾氏は現在わずかに残っている地鶏のうち狸々地鶏について調査し、体型は卵用種に近いが体にくらべて翼が大で飛翔力の強かった野鶏時代の特色をとどめていること、体重は成雄一八〇〇グラム、成雌一四〇〇グラム、若雄一四〇〇グラム、若雌一〇〇〇グラムであること、年間産卵数は一〇〇ないし一四〇個程度であるが、就巢性は強く三〇、五〇個を産むごとに就巢すること、卵は長径五〇ミリメートル、短径四〇ミリメートルで平均重量は四二グラム、大きいものは四五グラム、卵殻は褐色であること、肉質は美味であるが肉量は少ないこと、性質は概して温順であるがなお多分に野性が残っていること、強健で順応性が強く、受精・孵化率も良好であることなどを述べている。

今日における右のデータはもちろんのこと、『経済要録』の場合にしても、ここで対象としている時代よりもずっと後代のものであり、その間に改良が加えられて体格の改善や産卵能力の向上したことも考えられるから、ここにひいた条件が必ずしもそのままかのぼってあてはまるとは思われないが、当時の鶏がここにあげたものとそれほど大きくへだたることはないであろう。それにしても地鶏の産卵能力は相当のものであり、したがって古代においても、肉の利用のみならず食用のための採卵の目的にも充分かなうものであったとみて差支えないと考えられる。

〈文献〉

- 直良信夫『古代人の生活』至文堂（一九七二）
芝田清吾『日本古代家畜史の研究』学術書出版会（一九六九）
『古事記』、『日本書紀』（『新訂増補国史大系』吉川弘文館）
『万葉集』（『日本古典文学大系』岩波書店）
小穴彪『日本鶏の歴史』日本鶏研究社（一九五一）
和田清・石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店（一九七三）
『古語拾遺』（『群書類従』第一七輯 経済雑誌社（一八九四））
加茂儀一『日本畜産史』法政大学出版局（一九七六）
佐藤信淵著・滝本誠一校訂『経済要録』岩波書店（一九六九）

わが国における鶏肉・鶏卵の食用(二)

前章につづく時代として、この章では、本問題展開の内容に則し奈良時代以前の三〇〇～四〇〇年をも含めて奈良・平安時代の状況を検討することとする。

この時代においても前の時代にひきつづいて、狩猟による獲物の食用と、一般的ではなかったであろうが家畜の屠殺とその食用がなされていたと考えられる。鶏を中心に、関係のある史料を以下にあげながら考察を加える。

後にくわしく述べるように、この時代になるときわめて頻繁に殺生禁断や肉食禁止あるいは放生の令が発せられるようになり、このこと自体、当時動物の飼育や屠殺、そして肉食が行なわれていたことを裏書きするものであり、これらの詔勅や布令がくり返し出されたことは、それにもかかわらずそのような習慣が容易に止まなかったことを物語っている。これらの諸令については後に具体的に例示するので、さしあたり、当時の状況を示しているそれ以外の資料をいくつかあげ若干の検討を加えたい。

『令義解』によると、『養老律令』（養老二年、七一八）のなかに家畜や肉食に関係のあるいろいろな規定があったことがわかり、当時の模様を知ることができる。まず職員令に主油司の規定があつて調の膏油（膏は動物の脂肪、油は植物油）をつかさどることが定められており（『令義解』卷一職員令第二）、したがって諸国からこれらのものが貢納され

ていたことがわかる。また賦役令は、猪脂、馬の脳、雜腊（鳥獸の乾肉）が貢納されていたことを示している（同書卷三賦役令第一〇）。當時、猪を飼う部が存在していたことはそれを示す名前のあったことにより知ることができ、またさきにもふれたように、猪の飼われていたことを示す地名も知られている。さらに神祇令の規定では、祭祀のとき神事にあずかる者が齋戒の期間、肉食することを禁じており（同書卷二神祇令第六）、このことは逆にふだんは肉食をすることがあったことを示すものである。僧尼令によると、僧尼でさえも病氣の際には薬として肉を食べることが許されていた（同書卷二僧尼令第七）。また、官の馬や牛が死んだ場合には、皮、馬腦、角、牛胆を収納し、官私の牛馬が使用中に死んだ場合は皮と肉はその地で売却処分にしてよいとされており（同書卷八厩牧令第二三）、したがって当然それらの肉は一般において食用とされたわけである。なお当時の説話にも、庶民のあいだにおける牛馬の食用を示すと考えられるものはいくつかみられる。（たとえば、『日本靈異記』中卷第二四話、『今昔物語集』卷第一五第二七話、同第二八話）

ところで、『続日本紀』卷第八元正天皇養老二年（七一八）四月の条に左の記事がみられる。

乙亥。筑後守正五位下道君首名卒。首名少治律令。曉習吏職。和銅末。出為筑後守。兼治肥後国。勸人生業。為制条。教耕營。頃畝樹菓菜。下及雞豚。皆有章程。曲尽事宜。

すなわち、筑後守道君首名の治績を記した九州地方における農事奨励の記事であって、鶏や豚を一定の飼い方によって飼わしめたことがわかる。彼の筑後守としての在任は、文面によると和銅（七〇八～七一五）の末からであり、後に述べるように、そのすこし前の天武天皇四年（六七六）の殺生禁断の詔勅では、牛、馬、犬、猿、鶏の肉を食べることが禁じられているのである。そしてこれら以外の肉についてはその限りにあらずとされている。なおこの詔勅で豚が禁止の対象となっていない点についてはいろいろな解釈ができるが、当時の豚というのはおそらく猪を飼ったものであって、例外的な猿を除いては野獸を食することが禁じられていないことと相まって、豚も野獸の一つと解釈されたためかもしれないし、あるいはまたここにあげられている五種の動物とちがって猪はその肉を食用とすることだけを目的として飼われていたので、それを禁止することがあまりにも実情に反するものであったためかもしれない。猪はもちろん貴族階級のあいだでもさかんに狩猟や食用の対象とされていたのである。

それはともかくとして、このように詔勅によって中央で一たん食用禁止の対象とされた鶏についてその飼養を奨励しているということは、地方の部落などでさかんに飼養し食用とされていた実情に即しそれを是認した上での施策であったとも思われるが、地方行政庁といえどもいやしくも官が、中央で食用禁止とされた鶏の飼養を奨励しているのは、食用として利用せしめるためではなく少なくとも名目は採卵のための飼養を対象としたものと解釈した方が妥当のようである。鑄方貞亮氏の意見も

同様であつて、これが採卵を目的とした養鶏であらうと推察している。採卵だけを目的とした養鶏であつても、さきに述べたように、推定される当時の鶏の産卵能力からみて、農業振興上、充分奨励に価するものであつたと考えられる。またそうであるならば、鶏卵がかなり食べられていたということになるであらう。しかし鶏の食用に対して禁止令が出たほどであるから、もちろん実際には鶏肉もまた食べられていたとみるべきであらう。

される。(なお『延喜式』(延長五年、九二七)にも、卷第三神祇三臨時祭の霹靂神祭の条に鶏が、卷第四神祇四伊勢太神宮の条に鶏および鶏卵が供え物として記載されている。)

さらに、『延喜式』の卷第三神祇三臨時祭の条にはまた左の記事がある。

このように『皇太神宮儀式帳』などにおける供え物に鶏や卵がみられることは、天武天皇四年（六七六）の殺生禁断令の場合に鶏が牛、馬、犬等の家畜と同列にあつかわれていたのと比較して、仏教における殺生戒と神事における場合とのちがいによるものとも思われるが、少なくとも平安時代においては貴族階級のあいだで鶏肉や鶏卵を食べる場合があったことを示すものと考えてよいであろう。

肉でつくった馴れ鮓、猪膏（猪の脂肪）、猪突（猪の肉）などが、供え物、貢納品、臣下への給わり物などとして各所に記載されており、当時朝廷において獣肉やその脂肪がかなり食用とされていたことを示している。朝廷ですでに以前から獣肉が食べられていたことをより直接に物語るものとして、一例をあげるならば『続日本紀』巻第二〇天平宝字二年（七五八）の条に、孝謙天皇が皇太后の病氣平癒のため供御の猪や鹿の肉を断ったという記事がある。すなわち、しばしば殺生禁断令を出した天皇自身このように獣肉を食用としていたことがわかる。

一方、庶民のあいだで野性の動物の肉を食用とすることが普通であったことは、丹波の国の男の妻が鹿の鳴く声を聞いて煎物や焼物にして食べたろうまいだらうといったという『今昔物語集』の説話（巻第三〇第一二話）などをあげるまでもなく、充分考えられるところである。また同じく『今昔物語集』巻第一九第六話の内容から、産後の肥立ちに肉食がよいとされていたことや市に獣肉が売られていたことがうかがわれるし、同書巻第一二第二七話、巻第一五第三六話は、病の治療に肉食が最良であるとされていたことを示している。このように、当時一般庶民層のあいだでも肉食の栄養的な価値が高く評価されていた。

ところで、『日本霊異記』中巻第一〇話は「常鳥卵煮食以現得二悪死報縁」と題して、和泉の国のある男が常々鳥の卵を煮て食べていたが、天平勝宝六年（七五四）のある日、鳥の中を走り狂って大火傷を負い間もなく死んだという説話をのせている。同様の話は『今昔物語集』巻第二〇第三〇話「和泉国人、焼食鳥卵得現報語」にもみられる。これらの

話は、さきに引用した中国隋における話をもとに構成されたものと考えられ、殺生の報いを説いた仏教説話ではあるが、当時わが国において鳥卵が食べられ、しかもそれが煮たり焼いたりして食用とされていたことを示していると考えてよいであろう。ここでいわれている鳥卵が必ずしも鶏の卵をさしているとは限らないが、鶏卵の場合も同様の調理がなされたものと想像される。

この時代における食用以外の鶏の用途としては、やはり報晨や闘鶏などが考えられるが、とくに平安時代には宮廷においてさかんに闘鶏が行なわれたことが諸記録から明らかであるし、庶民のあいだでの闘鶏も、京都においては一時狂気の沙汰と思われるほどの流行をきたし禁止令が出たほどである。闘鶏のことは各種の文学作品の中にも述べられている。（たとえば『栄花物語』巻第八はつはな、『古今著聞集』巻第一九草木第二九など。）

さて、わが国への仏教の伝来は六世紀の中頃とされているが、やがて大和朝廷がこれを国家的な宗教として認定するにおよび、仏教の戒律である殺生禁断の教えもまた重要な国是の一つとなった。そして、殺生、肉食の禁止の詔勅や飼っている生物を放ってその生を全うさせるための放生令が、しばしば発せられることになるのである。なかには病氣平癒、凶作、天変地異などに対する祈願、大仏開眼に関連してその功德の念願といった目的を有するものもあり、また一定の期間を限っての禁止を命じたものもあるが、いずれにせよまことに相ついでの布令であった。主なものだけでも以下のごとくである。

文献の上にみられる殺生あるいは肉食の禁止の詔勅の最初のものは、左に掲げる『日本書紀』卷第二十九天武天皇四年（六七六）四月の禁令である。

庚寅。詔^{チノ}諸^ノ国^ニ曰。自^レ今以後。制^{イサメ}諸^ノ漁^ノ獵^ノ者^ヲ。莫^オ造^{オリシ}檻^シ絆^{フナ}及^ニ施^シ中^ニ機^ヲ槍^ヲ等^ノ之^ヲ類^ト。亦^モ四^ノ月^ノ朔^ノ以後。九^ノ月^ノ卅^ノ日^ノ以前。莫^オ置^{コト}此^ニ滿^ミ沙^サ伎^キ理^リ梁^ヲ。且^モ莫^オ食^{コト}牛^ヲ馬^ヲ大^ニ猿^ヲ雞^ヲ之^ヲ完^ト。以^ハ外^ハ不^レ在^ニ禁^{カキリ}例^ト。若^ハ有^ニ犯^ハ者^ノ罪^ム之^ヲ。

この内容についてはさきにも若干ふれておいたが、このように漁獵の方法に一定の制限を設け、また牛、馬、犬、猿、鶏の肉を食べることを禁じているのである。この時期において、鶏がとくに禁止の対象に加えられている点は注目しておきたい。

ついで翌天武天皇五年（六七七）には放生の詔勅が二度にわたって出され（『日本書紀』卷第二九）、文武天皇元年（六九七）にも放生の詔勅が発せられた（『続日本紀』卷第一）。

養老五年（七二一）七月の詔勅では、殺生禁断の教えを説き、左記のような放生を行なわしめている（『続日本紀』卷第八）。

……宜^{タカ}其^ノ放^ノ鷹^ノ司^ノ鷹^ノ狗^ノ。大^ニ膳^ノ職^ノ鷓^ノ鴒^ノ。諸^ノ国^ノ鷄^ノ猪^ノ。悉^ク放^テ本^ニ处^ニ。令^ム上^ニ遂^ニ其^ノ性^ト。……

すなわち、この時は鶏、猪ともに放生の対象となっている。

天平二年（七三〇）には猪や鹿の乱獲を禁ずる詔勅が発せられた（『続日本紀』卷第一〇）。また同四年（七三二）には天候不順による不作に対する祈願として、屠畜を断ち、百姓の飼っている猪を買いとつて放生せしめており（同書卷第一一）、同九年（七三七）の不作に際しても屠殺を禁ずる詔が出されている（同書卷第二二）。そして同一三年（七四一）には、馬や牛が役用として有用な家畜であるにもかかわらずこれを屠殺する百姓があるので、この禁を犯す者には重罰を課する旨の詔勅が発せられている（同書卷第一四）。

天平勝宝四年（七五二）には、大仏開眼にちなんで一カ年にわたって殺生禁断が令せられ、そのために生活していけなくなる漁業者に米が給せられた（『続日本紀』卷第一八）。天平宝字二年（七五八）に、皇太后の病氣平癒祈願のため、半年間の殺生禁断を命じまた猪鹿の類の供御を禁ずる詔勅が出された（同書卷第二〇）ことは、さきにもふれたところである。

さらに、延暦一二年（七九三）に七日間の殺生禁断令が（『日本後紀』卷第二逸文）、翌一三年（七九四）には地震の厄払いの目的と思われる三日間のやはり殺生禁断令が（同書卷第三逸文）それぞれ出されている。また延暦一〇年（七九一）には伊勢ほか六カ国等の百姓が牛を殺して漢神を祭ることを禁じており（『続日本紀』卷第四〇）、同二〇年（八〇一）にも越前に対し再度同様の禁止令が発せられ（『日本後紀』卷第九逸文）、このように明らかに異教の風習に対する禁止を目的としたものもみられるようになった。

延暦二三年（八〇四）には、牛が運搬用として重要であるにもかかわらず無頼の徒が犢の皮をはいで鞍をつくることが流行しているの、これを強く禁ずる旨の詔勅が出されている（『日本後紀』巻第二二）。これなどもさきの天平一三年の詔勅と同様、役畜の保護という点にかなり意が用いられているようである。なお鞍具をつくるために牛馬を屠殺することの禁令は、弘仁元年（八一）にも出されている（同書巻第二〇）。大同四年（八〇九）には太上天皇の病氣平癒を祈って七日間の殺生禁断が行なわれ、その間に漁師には食糧が給せられた（『日本後紀』巻第一八逸文）。弘仁三年（八二二）の詔勅は、東大寺の近くでの殺生を禁じ、またこの頃禁制が非常に軽んじられていたことを述べている（同書巻第二二）。

殺生禁断はその後もしばしば布令されたが、やや降っては貞観七年（八六五）に一定期間の殺生禁断令が（『日本三代実録』巻第一〇および巻第一一）、また元慶六年（八八二）には放生令が（同書巻第四二）出されている。

以上のように布令がくりかえし行なわれたことは、禁断の戒めが容易に実行されず、動物の屠殺や肉食があとを絶たなかったことを物語るものである。これらの詔勅の発布は、もちろん仏教の普及の強化という目的のために国の施策の一つとして行なわれたものではあるが、その背景には、牛や馬が農業の振興や軍備の充実あるいは交通などのために必要でありそれらを保護するという別の目的もあった。当時中央政府が農業の振興に多大の力をそそいでいたことは、勸農についての度重なる詔勅

の発布等をみてもわかるところである。しかし、これらの布令のさらにもう一つのねらいが渡来民に対する政策にあったことを、加茂儀一氏は大要つぎのように指摘している。

渡来民はすぐれた技能や知識の所有者であり、古代国家形成の過程にあった大和朝廷は、はじめは彼らを歓迎して盛んに産業技術の導入をはかり部民としてもその技術を重用していたのであるが、地方における渡来系集団は次第に経済的な繁栄と権力の増大をきたすようになった。そしてこのような社会的集団ができることは、中央集権的な支配体制を目的とする大和政権にとっては決して好ましいことではない。一方、やがて国家の基盤も確立してくるにおよんで、中央政権は彼らへの対抗策として、諸記録にもみられるように彼らの集団の地域的な配置転換をはかったり、あるいは彼らの地位や職業を社会的にできるだけ低くするような政策をとり、さらに、彼らの常とする動物の屠殺や肉食に対しても、それをおさえようとする意図を含めてその禁止令を出した。そして、このような政策は平安時代にはいってもつづけられている。また、布令のなかにはときにはかなり対象の的をしばったものもあり、たとえば、前記の牛を殺して漢神を祭ることを禁ずるような彼らの信仰への対抗策をとっている。

先住の日本人が狩猟によって野生の鳥獣はとって食べても、食用のために家畜を飼いこれを屠殺することが少なかったと考えられるのに対して、渡来人やその子孫たちは、日本に定住後も彼らの伝統的な風習にしたがって、家畜を屠殺してその肉を常食とする生活をつづけていたので

ある。たしかに、殺生、肉食の禁止令は野生の獣類をも含めた動物一般を対象としているものも多いが、家畜のみを対象としたものが少くない。

このように、家畜の屠殺禁止令を主として渡来民やその子孫を目標に置いて発せざるを得なかったのに、必需品である皮革を彼らに仰がなければならなかったということは皮肉なことである。皮革の供給が主として彼らによってなされていたことは、『延喜式』にみられる皮革の貢納国が、集団的に渡来した彼ら外来民の移住地とほぼ一致していることから想像される。前に記したように、ここで述べた渡来民に対する政策上の意味での諸禁令の問題は、主として加茂氏の所説によったのであるが、彼らに皮革の供給をまたなければならなかったこととの相矛盾するかにみえる点の実情は果してどのようなものであろうか。

平安時代も時がすすむと、奈良時代の後半からすでに破綻をみせはじめていた律令体制は崩壊の一途をたどり、これに戦乱が加わっていちじるしい社会不安が出来る。その結果、肉食の情況も従来とは若干かわった様相を呈したと考えられる。すなわち、庶民のなかには飢えをしのぐために家畜を殺してその肉を食べる者も多かったであろうし、また皮革の生産も無頼の徒の手にゆだねられ、彼らも当然牛馬を屠殺してその肉を食べたであろう。しかし、社会の混乱に対する神仏の加護を求め、また生き物を殺すことがあまりにも常態化したことに対処するためか、大治元年（一一二六）に魚や鳥を網でとることを禁じた放生を行なわしめるなど（『百鍊抄』第六）、この頃にも殺生に対するいましめが

何回かなされている。

以上、奈良時代、平安時代の情況について眺めてきたわけであるが、この時代になると肉食一般についてはもちろん、鶏肉、鶏卵の食用に多少とも関連のある事項を文献的な史料から拾うことはできたものの、鶏の飼育や鶏肉、鶏卵の食用の実情に関して充分な手がかりが得られないという点では、それ以前の時代の場合と大差ない。しかし、大まかなところを要約するならばおおむねつぎのようになるであろう。

野生の動物の肉は、貴族階級においてもまた民衆のあいだでも、かなり普通に食用の対象とされていた。家畜の肉は、貴族階級では食用とされることはほとんどなかったが、民衆の少なくとも一部のあいだでは根強く食べられていたらしい。また肉食の栄養上の意義については上下とも充分な認識をもっていた。一方この時代、殺生禁断、肉食禁止、放生等の諸令が頻繁に発せられた。これはもちろん仏教の戒律の徹底のためであったが、それ以外にもいろいろな目的を有し、ことに家畜を対象としたものには、農業振興やさらには渡来民やその子孫に対する対抗策といった意味もあったようである。これらの禁令によって次第に肉食が制約され、とくに貴族階級では獣肉を食べることが少なくなっていくということはあったかもしれないが、一方では平安時代末期における社会の混乱なども手伝って、肉食の風は、その内容はともかくとして、やはりいつまでも残っていたと考えてよからう。

このような情況のなかにあって、鶏も他の家畜とともに飼育され、闘鶏、報晨等にも大いに利用されたが、食用としても、その程度はともあ

れ、鶏肉、鶏卵ともに対象とされていた。この時代になると、前の時代にみられた鶏の神格的・宗教的な意義は次第にうすれてきたものと想像され、また一面では、鶏は他の家畜である牛や馬のような四足獣とはちがって、人間の心情からいっても、仏教上の戒律の点からも、屠殺や食用にあたって低抗感が少ないこと、さらに農耕用の家畜ではなく繁殖・飼育も容易であること、軍事とも無関係であることなどの理由から、他の家畜とくらべると食用の対象となる場合がかなり普遍的であったものと考えられる。貴族階級においても、少なくとも平安時代には若干は食用とされることがあったと推定される。

それでは、以上のように鶏肉や鶏卵がなにかの程度において食用に供されていたとするならば、それらはどのような調理あるいは加工をほどこされていたであろうか。とはいっても、当時の鶏肉や鶏卵の調理ないし食用形態を示すものは全くといってよいほど見出すことができない。したがってほとんど推定の域を出ないわけであるが、最後にこの点について若干考察を行なっておくこととする。

奈良・平安時代における貴族階級の食事等の一般的なことについて知られているところから敷衍するならば、他の食品の場合と同じく、鶏肉、鶏卵の調理・加工もさして高度の技術を要しない比較的単純なものが多かったと考える間違ひはあるまい。

すなわち、鶏肉であれば一般の鳥獣肉の場合と同じく、膾、腊のような乾物、肉醬などのほか、煮たり、焼いたり、また羹にすることももちろんあったであろう。さらにはときには鮓の材料にすることもあったかも

しれない。しかし膾や乾物にしたり、煮たり焼いたりする場合でも、当時の食習として、あらかじめ調味することはなく、食事の際に塩、酢、醬等の調味料をつけて食べるのが普通であったと考えられる。一般庶民の場合は、右のような調理法のなかでも比較的手のかからないいくつかのものが用いられたのではなからうか。

なお平安時代、鳥獣類のなかで最も珍重されたのは雉であったように、貴族階級の晴の饗膳には欠かせぬものであったらしい。

つぎに鶏卵の食用形態については、実態を推測することが一層困難である。鶏肉の場合と同じく、複雑な調理がなされたとは考え難い。さきに述べた『日本霊異記』や『今昔物語集』の説話からは、煮たり焼いたりして食べられていたことが推察される。さらに生のままで食用とされる場合もあったであろう。前記のように中国では『齊民要術』などにも生卵の食用例がほとんどみられないが、鳥獣魚肉の生食に慣れていたわが国の場合には、卵に関しても生のまま食べることにそれほど大きな抵抗はなかったのではないかと想像できる。

ところで、卵に関連してこの時代には餅脰（ひなた）（餅餠）という食品があったことが知られている。中国から伝わった唐菓子の一つであって、『倭名類聚抄』巻第一六に左のように述べられている。

餅脰 楊子漢語抄云裏餅中納煮合鵝鴨等子并雜菜而方截一名餅脰

達鑑反
肴也

小麦粉でつくった皮のなかに鵝、鴨等の卵や雑菜を煮て包み四角に切ったもののようである。『箋注倭名類聚抄』巻第四の餅脰の説明のなかに、『唐撫言』をひいて「食之甚美、皆乳酪膏腴之所^レ為」とみえるところからすると、乳酪等材料の一つとして用いられたらしい。いずれにせよ、鵝、鴨等の卵とあるところから察すると、鶏卵が用いられることもあったと考えてよいのではなからうか。だとすれば奈良・平安時代の鶏肉、鶏卵を用いた食品のなかでは、中国より伝播した加工食品ということもあって、珍らしく手のこんだものであったといつてよいであろう。この餅脰は当時しばしば食べられていたらしく、たとえば『枕草子』(一三三)や『御堂関白記』(長保六年(一〇〇四)二月二十九日の条)に出てくるし、また列見・定考の際に供されるのが例であったようである(『西宮記』巻八・八月、『待中群要』第六、『兵範記』(保元三年二月の条)など)。

なお、『倭名類聚抄』巻第一八には「卵 陸詞切韻云卵^{音瀬和名加比古}鳥胎也」とあり、当時の文学作品などからみても、わが国古代においては鶏と限らず鳥の卵はもっぱら「カヒゴ」(「カヒコ」)あるいは「カヒ」と呼ばれていた。「カヒ」は殻の意であったようである。「タマゴ」という呼称は、「カヒゴ」の俗語として室町時代末頃から使われはじめたといわれている。

いずれにしても、古代における鶏肉、鶏卵の調理法の詳細は不明であるが、上記したように、複雑な調理をほどこして食べられることはほとんどなかったと考えられ、したがって、中国においてふるくから鶏肉

や鶏卵に対してもすでに述べたようなきわめて高度な加工・調理が行なわれていたことは比ぶべくもない。当時のわが国が中国を範としてその文化をひろくとり入れ、食品の素材もまたかの地から多くのものが伝播したにもかかわらず、調理方法まではそのまま模倣することが容易になされなかったのは、食というものがそれぞれの民族において一つの体系としての文化をかたちづくっており、いろいろな条件が適合した場合においてのみ外来のものが定着することができることによるためであろう。

△文献▽

- 加茂儀一『日本畜産史』法政大学出版局(一九七六)
鋳方貞亮『日本古代家畜史』河出書房(一九四五)
東京帝国大学文学部国語学国文学研究室編『大日本古文書』巻之二、巻之八 東京帝国大学(一九〇一、一九一二)
『皇大神宮儀式帳』(『群書類従』第一輯 経済雑誌社(一八九三))
正宗敦夫編纂・校訂『倭名類聚鈔』風間書房(一九七〇)
京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編『狩谷棧斎箋注倭名類聚抄』全国書房(一九四三)
『御堂関白記』上巻(与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編・校訂『日本古典全集』第一回 日本古典全集刊行会(一九二六))
『西宮記』(『改訂史籍集覧』第二八冊 史籍集覧研究会(一九六八))
『待中群要』(『続々群書類従』第七 国書刊行会(一九〇七))
『兵範記』(笹川種郎編・矢野太郎校訂『史料大成』一七・兵範記三 内外書籍(一九四〇))

『今義解』、『続日本紀』、『延喜式』、『日本書紀』、『日本逸文』、『日本後期』、『日本三代実録』、『百鍊抄』（これらは『新訂増補国史大系』（吉川弘文館）によった。）
『日本霊異記』、『今昔物語集』、『栄花物語』、『古今著聞集』、『枕草子』（これらは『日本古典文学大系』（岩波書店）によった。）

おわりに

わが国古代における鶏肉、鶏卵の食物としての利用の情況は、はじめに述べたように、それに関連する史料がきわめてとぼしいこと、その他の諸事情のためにほとんど不明であった。したがって直ちにこれを明白にし得るものでないことはもちろんであって、本稿においてもはじめからそれを期待したわけではない。稿をまとめた結果をみても、課題のいくつかは解明できたとしてもやはり問題の核心にはやや遠い感がある。最も把握したいと思っている庶民の実態について、明らかにし得たことはなはだ少なかったことは、とくに心残りの点であった。また、本稿でとりあげた諸事項を相互に関連性をもたせながら総合するという点において、決して充分であったとは言いがたい。これらの理由の一つは、間接的な証拠による推論を重ねながら不十分な資料からの間違った独断を避けるために、故意にはっきりした結論を下さなかった場合がしばしばあったことにある。

このように、筆者自身隔靴搔痒の思いであるが、少なくとも主題の背

景となる基礎的な事柄に関しては、充分とはいえないが広い角度からある程度整理することができたものと考えており、この問題の一層の究明のための足がかりとし、また今後中世以降の鶏肉、鶏卵の食用を考える場合の基盤ともしたいと思っている。